

国語科 4年B組	語り手になろう～ごんと兵十とわたし～ 「ごんぎつね」	宮脇 隼
---------------------	---------------------------------------	-------------

1. 単元について

ごんぎつねは、悲劇的な結末が読者の心に衝撃を与える作品である。4年生の子どもたちにとって中心人物が命を落とす作品はこれまでにもあるが、これほどの後味の悪さを与えることができる教科書教材との出会いは初めてではないかと思う。ごんと兵十の心のすれ違い、それによって引き起こされる悲劇的な結末は人の無力さや不条理さを4年生の子どもにもわかるかたちで伝えてくれる。さて、この作品にはあまり描かれることのない「語り手」が存在している。子どもたちは「語り手」に着目することもなく中心人物に沿った読み取りを行っていくのだが、その存在を知り考えることでこの作品の見え方は変わる。名作と呼ばれる作品は「語り手」により、長い年月をかけて私たちのもとに伝わっている。本実践では、「語り手となり、物語を誰かに伝える」という視点で作品を読み味わわせる。作品を語るためにには、登場人物に寄り添うことや自分の考えを付け加えることが大切である。また、「この話をしないと、最後の結末を伝えても意味がない」という作品の構成や仕掛け（伏線）にも目を向けることができる。ごんぎつねで「語り手」としての視点で学習したことを生かし、別の作品でも誰かに語る力を育てることができるような学習にしたい。そのためにも、物語を語るための視点を設定することや、その視点に基づいた読み取りを行うことで目的を明確にした読みの学習を行っていく。視点は、登場人物について、事件の始まりについて、物語のクライマックスについて、読後感についてなど、子どもたちの実態に応じて設定したい。それらの視点を明確にし、子どもたちの語りの元となるものを「語りの設計図」とした。ごんぎつねで学習したことを生かし、他の作品でも「語りの設計図」を用いて聞き手に共感してもらえるような語りを目指している。

2. 単元設定の理由

（1） 本実践の主張点

「語りの設計図」を通した語り手を育てる読み取りを行うことで、様々な視点で、物語を読み取る子が育ち、一人で完結する読書ではなく、読書で他者とつながろうとする子どもが育つだろう。

（2） 教科提案とのかかわり

【国語科提案】 つながり学び合う子ども～視点が交わる読みの授業～

国語科では、「問い合わせ、学び続ける子どもたち」を育むため、「つながり」をキーワードとしている。この「つながり」とは、言葉のつながり、他者とのつながり、学習のつながりとしている。今年度は、他者とのつながりに重点を置き研究を進めている。他者とのつながりをもつためには、まずは自分の考えを表出することから始まる。一人一人の考え方の根拠となるところには、一人一人の異なった視点での読みがあり、それを表出することですれが生まれる。そのすれに気づき、追究する中につながり学び合う子どもの姿がある。その経験が、一面的な視点ではなく多面的な視点をもって読みを深めていく子どもたちを育していくと考えている。

本単元では、一人一人の作品を読んだ感想を元に、伝える相手にどんな感想をもってもらいたいかを学習の中心にして進めていく。ただ、自分の感想を押し付けるような語りをするのではなく、自分の語る内容を吟味し、仕掛け（伏線）を作り、自然と聞き手が語り手と同じような感想をもてるような語りの構成を考えさせたい。そのためにも、ごんぎつねを通して、同じような感想でもそこに至るまでの読みにすれがある考え方を大切に交流させたい。そうすることで、聞き手による物語の感じ方の違いは根拠となる文章の違いから生まれていることに気づき、作者の言葉選びや構成の工夫、仕掛けに目を向けさせることができる。そこで

学んだことを語り手になるための「語りの設計図」作りに生かしていきたい。

3. 単元目標

○登場人物の気持ちの変化や性格、情景描写について、場面の移り変わりと結び付けて具体的に想像することができる。【読（1）エ】

○相手に伝わるように、登場人物の心情や出来事を挙げながら、伝えたい感情が明確になるような話の構成を考えることができる。【話（1）イ】

4. 単元計画（全13時間 本時9/13）

学習活動
第1次 語り手ってなに？ 「語りの設計図」で語り手を目指そう。 ①物語の語りを聞こう。知っている物語を語ろう。 「スイミー」「お手紙」「スーサの白い馬」「モチモチの木」 ②仕掛け（伏線）を読もう。 ③語るときに大切にすることを決めよう。「語りの設計図」に必要な項目。 ・登場人物について（中心人物、重要人物）　・場面設定（時、場所）　・事件の始まり ・クライマックス場面　・後話（読後感） ④語る作品を選ぼう。
第2次 ごんぎつねで「語りの設計図」を作ろう。 ⑤初めの感想を書こう。 ⑥登場人物を語ろう。中心人物と重要人物について作者の仕掛け（伏線）は。 ⑦場面設定を語ろう。どんな時代。どんな場所について作者の仕掛け（伏線）は。 ⑧事件の始まりを語ろう。誰が誰に何をしたかについて作者の仕掛け（伏線）は。 ⑨クライマックス場面を語ろう。何が変わったのか、誰が何を変えたのかについて仕掛け（伏線）は。 ⑩読後感を語ろう。どんな感じ方か。その感じ方を伝えるために語るときの仕掛け（伏線）を考えよう。
第3次 「語りの設計図」で語り手デビュー ⑪⑫視点で読んで、語る内容を決めよう。「語りの設計図」を作ろう。 ⑬語って、相手に作品を伝えよう。

5. 本時について

本時では、物語のクライマックスである「ごんの死」の場面を取り上げる。この物語を他者に語るとき、聞き手にはどのような感情をもってもらいたいのか、どのような感情を伝えたいのかという願いをもつことが学習の始まりとなる。そして、聞き手にも共感してもらうためには、欠かさず伝えなくてはならない記述や、登場人物の気持ちが存在する。同じ「悲しい」という感情でも、死んだことに対するものと、二人の気持ちのすれ違っていることでは、読みの深まりにも差がある。本時では、聞き手にどう伝えたいのかを手がかりにし、文章の構成や作者による仕掛け（伏線）の重要性に目を向ける学習にしたい。

また、本時における学びの深まりは、同じ感情でも感じ方のレベルが違うことを知ること。そして、それらを生み出している根柢となる文章の違いがあることに気づくことである。同じ感情をもったとしても人によっては根柢が違い、感じ方のレベルも違う。その違いをクラス全体で交流することで新たな自己を見つさせたい。